

リア王, エイハブ, ヒースクリフの研究

堀 出 稔

A Study of King Lear, Ahab and Heathcliff

MINORU HORIDE

エドモンド・ブランデンは、英語で書かれた三大悲劇を『リア王』、『白鯨』、『嵐ヶ丘』であると指摘した⁽¹⁾。他に英語で書かれた悲劇は数限りなくあるにもかかわらず、なぜ上に掲げた三つの作品を三大悲劇と考えたのであろうか。シェクスピアの後期の作品『リア王』は、老境に達した王が領地を三人の娘達に配分することから生ずる悲劇であり、ハーマン・メルヴィルの『白鯨』は、巨大な白鯨に片足を食いちぎられたエイハブ船長の飽くことのない復讐の物語である。そしてエミリー・ブロンテの『嵐ヶ丘』は激しい恋の物語である。各作品の描かれた時代と場所は全く異なっている。だがいずれの作品とも、その激しい起状に満ちた言葉に読者は圧倒され、人間の極限の姿を垣間見て、人間存在を改めて問い直さざるを得なくなるであろう。この小論においては、『リア王』、『白鯨』、『嵐ヶ丘』の順に作品をテーマに沿って分析し、エドモンド・ブランデンの指適した課題を考察してゆく。

リア王が老境に入り、三人の娘達にイギリス王国の領土とその執行権を譲渡しようとした時、彼の頭にはその後続く自分の悲劇をどれほど想像できたであろうか。ゴネリル、リーガンという二人の娘達の老いたリア王に対する孝養の欠除は、薄々気づいていたであろうが、最もいつくしみ、最も信頼していたコーディーリアの言葉が彼の心を満足させなかったのである。

Cordelia. Good my lord,⁽²⁾
You have begot me, bred me, loved me.
I return those duties back as are right fit,
Obey you, love you, and most honour you.

若くて純粋なコーディーリアが、心にもないことを話さず、親子の絆に従い、当然親に対する孝養は尽すと断言したにもかかわらず、リア王は彼女の言葉に不満をいだき、全く財産の譲渡はしないで、勘当してしまうのである。リア王は長い王位に就いていて、家来達によって従われ、意のままに生活をしているうちに、彼女の言葉の奥にある永遠の真理に対して盲目になり、王権の中に彼の精神の光を失っていたのであろうか。三人の娘達それぞれに、王位継承後いかに孝養を尽くすかを語らせ、その言葉の巧みなほど領土の配分を多くする、という最も簡単な方法がどうしてとれたのであろうか。老いたリア王には、王位の責任の重さから早く解放されたい気持ちがうかがわれる。さらに老いたリア王の心の不安、長く王位の座にあり、知らぬまに生じた人間的傲慢さが感じられる。このような要因が、最も信頼していたコーディーリアの偽りのない真実の言葉を理解させることを困難にさせ、その後の悲劇を引き起こすことになる。

Cordelia. Time shall unfold what plighted cunning hides,⁽³⁾

コーディーリアの言葉通り、リーガンとゴネリルはリア王の権力を奪い、彼の身のまわりを警護する兵士さえ取り上げ、荒野をさまよう孤独な老人にまで追いやってしまう。リア王はこの時始めて心の底から自分の愚さに気づき、コーディーリアに対して後悔の念をいだくと共に、自分を悲しみの淵に沈めた者達と自分自身の運命をも激しく呪う。

Lear. Rumble the bellyful ! Spit, fire ! spout, rain !⁽⁴⁾
Nor rain, wind, thunder, fire are my daughters.
I tax not you, you elements, with unkindness:
I never gave you kingdom, called you children;
You owe me no subscription. Then let fall
Your horrible pleasure. Here I stand your slave,
A poor, infirm, weak, and despised old man:
But yet I call you servile ministers,
That will with two pernicious daughters join
Your high-engendered battles 'gainst a head
So old and white as this. O, ho ! 'tis foul !

我々がこのリア王のあらゆるものに投げかける激しい怒りの言葉を聞く時、ヨブの神に対する悲痛な叫びを想起せざるをえない。ヨブが神の第二の試練を受け、ヨブ自身の生命にまで危険が及んだ時、ヨブは独白する。

After this opened Job his mouth, and cursed his day. And Job spake, and said,⁽⁵⁾
Let the day perish wherein I was born,
And the night in which it was said,
There is a man child conceived.
Let that day be darkness;
Let not God regard it from above,
Neither let the light shine upon it;
Let a cloud dwell upon it;
Let darkness and the shadow of death stain it;

彼は自分が生まれたことを悔み、その日を呪った。この不当とも思われる神の仕打ちを非難する。しかしヨブに対する神の厳しい呼びかけは、ヨブへの神の叱咤であり、激励であった。ヨブは神の激しい試練の中でついに自分の傲慢さを悔い改め、神の前に服従を誓う。このようなヨブの態度に対して、リア王の態度は対照的である。彼は人間社会のあらゆるものに不信の言葉を投げかけ、吹きすさぶ嵐の中で、自分に与えられた不当な扱いに対して、なぜそのような境遇に彼が追いやられねばならなかったか、と訴える。リア王という一人の人間存在が狂気に近い存在となって、全知全能の神の前に自分を曝け出そうとする。それは醜いものであろうと崇高なものであろうと、生きている人間の生命の燃焼であり、証であるように思われる。さてリア王の在位中、式部長官であったグロスター伯は、庶子エドモンドの陰謀によって追放され、フランス軍陣地のあるドーヴァーに向ってゆく。その途上、悲嘆にくれながら次のように言う。

As flies to wanton boys are we to th' gods;⁽⁶⁾
They kill us for their sport.

神々に対する人間の姿は全く無力であり、神々は我々を戯れの如くに殺してゆく、と言うのである。この言葉についてH・グランヴィル・バーカーは次のように批評している。

The tragic truth about life, to the Shakespeare that wrote King Lear, included its capricious cruelty.⁽⁷⁾

『リア王』を書いたシェクスピアにとって人生の悲劇的心理とは、偶然に生ずる残酷さを含んでいる、というわけである。運命に翻弄され、神に見放されたかのように見える。リア王はただその悲しい運命をじっと見つめて、耐えてゆくしかないのである。しかし彼がフランス軍陣地においてコーディーリアに出会い、自分の罪を詫びる時、何か一条の救済の光が差したかに見える。だがそれも束の間、リア王にとって救いの光とも言えるコーディーリアもフランス軍の敗北によって殺されてしまう。

Lear. Howl, howl, howl! O, you are men of stones!⁽⁸⁾
Had I your tongues and eyes, I'd use them so
That heaven's vault should crack! She's gone for ever.
I know when one is dead, and when one lives;
She's dead as earth. Lend me a looking-glass;
If that her breath will mist or stain the stone,
Why, then she lives.

この悲痛きわまる言葉を残して、リア王は絶命する。彼の人生は絶望の淵に沈められながらも狂気の一步手前で踏みとどまり、情念の炎が彼の理性を焼き尽くそうとするのに耐え、絶望を生身の体に受け、死に至るまでじっと絶望と対峙しながら生きていったのである。そこにはヨブのような神への服従はなく、一人の主体性を持ったあまりにも人間的な人間の姿が浮き彫りにされているようである。

さて、エイハブ船長についてはどうであろう。彼は18歳で海に出て、40年間捕鯨生活に明け暮れている人物であった。ある日突然、モッビ・ディクという巨大な白い鯨に片足を食いちぎられる。彼の捕鯨生活のうちで、モッビ・ディクという鯨との対決によって生じた心と体の痛手が、彼をその鯨への炎のような復讐の念に駆りたてる。たいていの人ならこの悲しい出来事を通して海から陸に上り、悲しみをいだきつつ、平穏無事の生活を送ることを望むであろう。しかしエイハブはそうではなかった。

Small reason was there to doubt, then, that ever since that almost fatal encounter, Ahab⁽⁹⁾ had cherished a wild vindictiveness against the whale, all the more fell, for that in his frantic morbidness he at last came to identify with him, not only all his bodily woes, but all his intellectual and spiritual exasperations.

50歳になっても若い妻と子供を残して、海に出掛け、決して陸に上ろうとはしなかった。ただひたすら自分の足を奪ったモッビ・ディクに対して復讐の念をつのらせる。彼のあらゆる思想上、精神上的の憤怒がすべてモッビ・ディクから生ずる、というこの執念の深さは常軌を逸している。さらにエイハブの性格をよく表現された言葉には、ビルダッド船長のエイハブについての説明がある。その中で彼はエイハブを a grand ungodly god-like man と呼んだ。⁽¹⁰⁾ 大変な罰当たりだが神々しい人物だと言うのである。この言葉の矛盾こそ、まさにエイハブの悲劇を的確

に表現されたものと言えるかもしれない。F・O・マシーセンはこのようなエイハブの姿を、次のように述べている。

He can see nothing but his own burning thoughts since he no longer shares in any normal fellow-feelings. His resolve to take it upon himself to seek out and annihilate the source of malignity, is god-like, for it represents human effort in its highest reach. But as he himself declares, it is likewise “demonic,” the sanity of a controlled madness. The control depends upon “that certain sultanism of his brain,” which cunningly builds its power over the others into “an irresistible dictatorship.”

この世の事を忘れ、炎のような心で、ひたすら悪に立ち向う姿は、作者メルヴィルの時代にあってはピューリタニズムの勤勉さと悪を憎む精神に通じ、まさに a god-like man であろう。しかし、それは同時に普通一般の考えを持つ人にとっては推し測ることのできない ungodly で demonic な存在なのである。当然捕鯨生活に憧れて乗船したイシュメイル、その友達のクイクエッグ、正直者のスターバック、無頓着で命知らずのスタッフ、平凡なフラスクなどにはエイハブ船長の意識は理解できないのである。さらにマプル神父は説教の中で、次のように述べている。

Delight is to him, who gives no quarter in the truth, and kill, burns, and destroys all sin⁽¹²⁾ though he pluck it out from under the robes of Senators and Judges.

真理のために何の容赦もせぬ男、まさにこの言葉そのものが、エイハブ船長の正常の狂気を表現している言葉のように思える。エイハブ自身にふりかかった悲惨な運命は、自分の招いたものではなく、偶然なのである。それ故に、なぜ彼がそのような悲劇を感受しなければならないか、という疑問が真理に向ってその不当な仕打ちを訴えているようである。倫理的に言えば、善への思考であり、その善を望めば望むほど、彼に悲惨な運命をしいた白鯨の暴力を憎悪するのである。さらに、白鯨に対する憎悪をつのらせればつのらせるほど、船員達の目にはエイハブが悪そのものに見え、悪の化身のような存在になってゆくのである。だが、船員の一人フラスクには、エイハブの白鯨を求める半狂乱の姿に同情さえ感じるようになってゆく。

And in sleep, when alone the grip of the conscious mind has been relaxed, Ahab's⁽¹³⁾ tortured soul shrieks out in nightmares, in its frantic effort to escape from the drive of his obsession.

復讐心に燃えるエイハブにも、眠りの中で必死にその妄想から逃れようとして泣き叫ぶ姿もあったのである。メルヴィルはこのエイハブの姿に、ゼウスの怒りに触れてコーカサスの岩盤に縛られ、自分の創造した禿鷹の餌食になってゆくプロメティウスの姿を想起したのではないかと、F・O・マシーセンは述べている。⁽¹⁴⁾ とにかくエイハブの復讐心には、ただ単なる悪魔的なものというだけではなく、人間が悪に立ち向かい、それを滅ぼし、善的なものを求めようとしながら、悪への憎悪の過度なあまり、自分自身も悪によって滅びてしまうという悲しさを含んでいるように思える。

今までリア王、エイハブの絶望に追いやられる過程と彼らの運命に対する戦いについて分析したのであるが、『嵐ヶ丘』におけるヒースクリフはどうであろうか。

ヒースクリフがなぜ復讐するに至ったか、その要因は三つある。捨子としてアーンショウ家

に養われることになっていたヒースクリフにとって、義父アーンショウ氏の保護によって健やかに育ってゆくかに見えた。しかしアーンショウ家の息子ヒンドレイは、ヒースクリフに対する父親の愛情が深まれば深まるほど、彼に憎しみをいただくようになる。さらにアーンショウ氏の死は、決定的にヒースクリフを不利な立場に追いやることになる。ヒンドレイのヒースクリフに対する迫害は、この事を契機に増々その度合を加えてゆく。召使のネリーの指摘しているように、ヒースクリフは元来悪魔的要素を持っていたとは思われなかった。それどころか、ヒンドレイの止むことのない迫害に対してじっと耐えていた。しかも義父の死を知ったヒースクリフはキャサリンとお互いの心を慰め合って、その死を悼む姿は純粹無垢なものであった。

.....; no parson in the world ever pictured heaven so beautifully as they did, in their innocent talk;

しかし、父の葬儀に再び嵐ヶ丘に帰って来たヒンドレイは、新たにヒースクリフへの憎しみをつのらせてゆく。彼はヒースクリフをアーンショウ家の養子としての立場から召使いの立場に追いやる。このようなヒンドレイの迫害は、ヒースクリフの性格に憎しみの火を燃え上がらせることになる。神を信じ道徳律に生きるネリーは、邪悪な人間は神によって罰せられ、人の罪を許すことを学ぶべきだ、と説得する。しかしヒースクリフのヒンドレイに対する憎しみは、復讐の情念に駆り立てる。

“No, God won't have satisfaction that I shall,” he returned. “I only wish I knew the best way ! Let me alone, and I'll plan it out while I'm thinking of that, I don't feel pain.”⁽¹⁶⁾

すなわち、ヒースクリフがやがて遂げるであろうヒンドレイに対する復讐が与える満足感は、当程神には理解できないものと言うのである。この言葉はヒンドレイへの絶対服従という絶望的な状態から、ヒースクリフの自我意識が、確固とした抵抗を開始する姿を暗示している。第二のヒースクリフの絶望と復讐に駆りたてる要因は、言うまでもなくキャサリンにある。キャサリンの悲劇性はこの世にあって自分の自我を完全に全うしようとして、その不可能であることを知りながら、あわれな最期を遂げる。このようなキャサリンではあったが、ヒースクリフにとって自分の命にも匹敵する恋人であった。その恋人が偶然にもヒースクリフが居るとも知らず、エドガー・リントンとの結婚をネリーに打ち明けるのである。ヒースクリフはキャサリンの話の途中、すなわち、It would degrade me to marry him,⁽¹⁷⁾ という言葉を聞いた瞬間立ち去ったとネリーは言っている。キャサリンがヒースクリフをどれほどリントンよりも愛していて、その愛の深さがどれほど異なっているかを話したところで、ヒースクリフにとってキャサリンが愛を裏切ったことに変わりはないのである。

最後のヒースクリフの絶望は、キャサリンの死である。ヒースクリフにとってキャサリンの存在は、misery, degradation, death, God, Satan⁽¹⁸⁾ さえ引き離すことのできないものと考えた。それ故にキャサリンの死は、ヒースクリフの人生にどうにもならない絶望の淵に沈めてしまうのである。唯一の希望であったキャサリンが生きている時は、苦しみの中であって救われた。だがその希望が彼から奪い去られた時、彼にとってこの世は絶望の極限なのである。キャサリンの死後のアーンショウ家・リントン家に対する復讐も無意味なものになってゆく。彼はただ自分に与えられた不当な仕打ちに対してじっと耐えながら、キャサリンの霊に満たされてこの世を去ってゆくのである。

結 論

リア王, エイハブ, ヒースクリフの順に分析してきたのであるが, 彼らの悲劇の共通性は, 彼ら自身が悲劇を生じさせたというわけではなくて, 外部からの不可抗力の作用によって, 絶望に陥し入れられたということであろう. その深淵から自分に目覚め, 何故にそれほどの罪もない自分が, そのような絶望に追いやらねばならないのか, と何かに向かって問いかけようとする. 彼らは絶望すればするほど, その意識は強く激しくなる. そこには聖オーガスティンの神への帰依もヨブの忠誠心もない. ただひたすら, 神と相対峙し, 自分に与えられた不当とも言える運命について訴えるのである. その問いかけは常に善へのあるいは真理への問いかけであり, 人間の追い求める永遠の姿であるかもしれない. その意志が強ければ強いほど, それを妨害しようとする悪に対して憎悪の念を燃やす. それがエイハブ及びヒースクリフにおいては復讐となり, リア王においては荒野での激しいあらゆるものへの問いかけとなったようである. エドモンド・ブランデンがこれら三つの作品を英語で書かれた三大悲劇と考えたのは, リア王, エイハブ, ヒースクリフのあまりにも不条理な存在のためではなかろうか.

Texts

- 1) Shakespere, William, *King Lear*, Cambridge University Press, (1975)
- 2) Melville, Herman, *Moby Dick*, Dent, (1968)
- 3) Brontë, Emily, *Wuthering Heights*, W.W. Norton & Company, Inc, (1963)

Reference Books

- 1) *The Bible*, ed. by John Stiling, The British & Foreign Bible Society (1963)
- 2) Tomoji, Abe, *The Brontë Sisters*, Kenkyusha, (1966)
- 3) Matthiessen, F.O., *American Renaissance*, Oxford University Press, (1968)
- 4) Granvill-Barker, Harley, *Preface to Shakespere*, B.T. Batsford, (1978)

Notes

- 1) *The Brontë Sisters*, P.1
- 2) *King Lear*, P.6
- 3) *Ibid.*, P.12
- 4) *Ibid.*, P.59
- 5) *The Bible*, P.414
- 6) *King Lear*, P.80
- 7) *Preface to Shakespere*, P.45
- 8) *King Lear*, P.119
- 9) *Moby Dick*, P.160
- 10) *Ibid.*, P.74
- 11) *American Rnaissance*, P.448
- 12) *Moby Dick*, P.47
- 13) *Ibid.*, P.47
- 14) *Wuthering Heights*, P.448
- 15) *Ibid.*, P.44
- 16) *Ibid.*, P.57

- 17) Ibid., P.71
- 18) Ibid., P.135